

News Letter No. 40

20年9月26日(金) 発信

# Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するとき —ユーラシア農耕史と環境—  
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤プロジェクト(加藤) e-mail:[sato@chikyu.ac.jp](mailto:sato@chikyu.ac.jp)

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



奇竹堂の竹格子(撮影:鞍田 崇)

## 公開シンポジウム「千里をかける竹」

小山修三(吹田市立博物館 館長)

## 公開シンポジウム「千里をかける竹」

小山修三（吹田市立博物館 館長）

吹田市立博物館では2008年7月5日から8月31日まで「千里の竹展」を開きました。そして、7月18日(金)・19日(土)に佐藤プロジェクト主催の公開シンポジウム「千里をかける竹」をおこないました。博物館が場所を提供し、佐藤プロジェクトが実施するという、こちらにとっては、オンブニダッコの企画でしたが、「火耕班」メンバーには早くから協力を依頼してあったので、展示にもその成果が反映され、興味深いものになったとおもっています。

シンポジウムは佐藤洋一郎「竹と地球環境」の問題提起にはじまり、一日目の「竹の文化と民俗」では、柏木治次(富士竹類植物園)「資源としての竹—竹の特性とその利用—」と、佐々木長生(福島県博)「ネマガリダケの民俗誌—磐梯山麓の籠屋聞き書き」の発表があり、そのあと、一般市民も交えた討論会をしました。柏木さんはタケ起源から説きおこし、世界への拡散(分布)と日本の有用竹について述べ、タケというふしぎな植物への理解を深めました。

佐々木さんは、民具は北日本では木質、西日本ではタケという違いをのべたものですが、「持ったときの重さがまったく違う、これは西日本の軽やかさに通じているのではないか」といかにも現地を這い回る民俗学者らしい言葉が印象的でした。



シンポジウム第一日目：発表者は柏木治次氏

2日目は、「竹細工と暮らす、竹細工と生きる」黒田和孝（茶ノ湯竹器師）と、「竹の焼畑—森の再生と持続可能な農耕のかたち」川野和昭（鹿児島県立歴史資料センター黎明館）をおこないました。黒田さんは佐藤さんとのトーク型式でしたが、実際に竹細工をやっている職人として、伝統を守りながら、現在の社会・環境変化に対応していく苦勞を語りました。川野さんは鹿児島からラオスに広がるタケの焼き畑と民具の文化的系譜の解明に挑む話でした。



仕事場での黒田和孝氏

2日目は座談会形式で、市民のために、わかりやすく、気楽にいこうと言っていたのですが、突然、焼き畑研究の泰斗、佐々木高明先生（元民博館長）があらわれたので、みんなガチガチに緊張してしまっただけで学会のような雰囲気になりました。これは成果というべきか誤算というか、ともにコーディネータをやった佐藤さんと頭を悩ませたことでした。

楽しかったのは、ボランティア居酒屋「たんぽぽ」での会でした。鹿児島芋焼酎、会津の清酒（戊辰戦争みただけ）をもちこみ、山形県温海の焼き畑カブまできたので、市民有志と活発な意見交歓ができました。



「たんぽぽ」での懇親会

右より佐々木長生氏、川野和昭氏、筆者。左より二人目が佐藤洋一郎氏

吹田市のある千里丘陵では、その竹林が「21世紀に残したい自然百選」に選ばれており、日常的にも、食用の筍のほか、労働具、生産具、建材、燃料、年中行事だけでなく、民話にも登場し、市民の心に深く入り込んでいます。ところが、現代、人と竹の関係は大きく変化して、プラスチック製品が氾濫し、燃料は石油やガスにかわり、安価な外国製品が大量に入ってきています。竹林を放置してしまった結果、モウソウチクが猛烈に繁茂して里山を荒らし「竹害」が叫ばれるようになっていきます。

しかし、竹を愛する市民がいなくなったわけではありません。竹を生かすのか殺すのか、その未来は？これから真剣に考えていかなければならない問題です。そのためにはまず、タケを正しく理解しなければならない、そんな、機会を与えてくださった佐藤プロジェクトにお礼もうしあげます。